

令和元年6月24日現在

機関番号：24402

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K02541

研究課題名(和文)世紀転換期の装飾と「近代性」をめぐる問題 独仏語圏における文化論的視座から

研究課題名(英文)The notions of the decoration and "modernity" in the turn of 19-20 century

研究代表者

白田 由樹 (Shirata, Yuki)

大阪市立大学・大学院文学研究科・准教授

研究者番号：00549719

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：19世紀から20世紀の転換期に欧州大陸で展開された応用芸術運動に関して、ベルギー、フランス、オーストリア、ドイツで提唱された理念や批評、実践の動向を相互の関係性に留意しながら、その接点や差異化の背景を掘り起こしてきた。また、工芸・建築家や美術商、批評家の主張と作品の特性と、政治や産業界、世論との関係を絡めて考察する中で、国家や社会階層間の競合意識と独自性の優先が、各国の「新しい芸術」のスタイルに反映されていく経緯が確認された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

アール・ヌーヴォーやユークレシブの先行研究が明らかにしてきたジャポニスムやケルトなどの影響源、思想的背景からの運動の理念的な解明に加えて、国家や地域、社会階層間の関係性に着目し、理論やメディアの言説傾向を読み直すことによって、応用芸術のスタイル傾向を決定つけていく社会的要因を明らかにする研究としての可能性を示した。また4カ国の地域的特性を掘り下げながら、その総体を俯瞰することにより、欧州大陸における応用芸術の動向をよりダイナミックに捉える視点が拓かれてきた。

研究成果の概要(英文)：This study explores the applied arts movement in Europe during the period of transition between the 19th and 20th centuries. We revealed the connections and the differences between the theories and practices proposed in Belgium, France, Austria and Germany by investigating the relationships among these countries. We also examined artists' and critics' arguments on modern "new arts" and their relationship with contemporary politics, industries and public opinion in each country: we confirmed that "new arts" styles emerged in conditions influenced by market competition with the cultural advantage of originality among the artists' countries and social classes.

研究分野：19世紀末フランス語圏(フランス、ベルギー)文化、ジェンダー・エスニシティ表象、アール・ヌーヴォー論

キーワード：新しい芸術 近代性 装飾 応用芸術 アール・ヌーヴォー 即物的芸術 世紀転換期

### 1. 研究開始当初の背景

19世紀末から急激にヨーロッパに広まったアール・ヌーヴォーやユークレシブスタイル等の装飾の様式は20世紀前半にほぼ完全に衰退したが、1950年以降にマドセンやペヴスナーがこれを生み出した応用芸術運動とともに再評価する形で取り上げたのを皮切りに、美術や建築デザイン史の分野で主に研究されてきていた。また、1980年代以降にはシルヴァーマンや天野知香が、当時の社会情勢や政治的関係、科学や思想の背景をふまえた文化学的視点による研究をおこなっている。前者は文学や美術とも関連する芸術思想、あるいはデザイン史上の意義や造形理論から、西欧各国における動向を広域的視野で扱う。また後者は、フランスなどの国家単位に領域を絞りつつも、運動を支援した個人や団体の活動と理念を、当時の科学言説から国家政策まで幅広い資料群と対照することで、その背景にある政治的・経済的關係性をミクロに分析する文化学研究の流れを作ってきた。しかし、美術史・建築史が扱ってきた広い地域に、文化学が多層的かつ詳細な検証方法を適用するには膨大な作業が必要となり、それまでほとんど手がつけられてこなかった。

研究代表者および分担者のチームは予備調査となる勉強会をおこない、各地域の運動やその理念を牽引した個人・グループの関係、とくに欧州大陸のドイツ語圏・フランス語圏の4カ国(フランス、ベルギー、ドイツ、オーストリア)の状況を検討してきた。その中で、国境を越えてこの潮流を共有した人的ネットワークに着目するところから、各々の研究領域でありおこなわれてこなかった新たな研究の可能性が見えてきた。それはただ単に各国の動向を並列し、比較するのではなく、その差異を相互の影響や反発を含めた流動的な関係の結果として見る、「間文化性」という視点からとらえようというものである。

### 2. 研究の目的

本研究は、19世紀末から20世紀初頭にヨーロッパ各地で流行したアール・ヌーヴォーやユークレシブスタイルと呼ばれる美術・工芸の様式と、その原動力となった応用芸術運動について、ドイツ語圏とフランス語圏各地の運動を牽引した人物のネットワークとその関係性、各々の社会的背景に着目することにより、その間文化的側面を解明することを目的とするものであった。とくに、これらの運動が盛んとなったドイツとオーストリア、フランスとベルギーを取り上げ、そこに関わった個人やグループに焦点を当てながら、各々の目指すべき「近代性」の理念が形成され、それぞれに異なる方向性を選択していく過程での相互の影響や対立関係を明らかにすることを目指した。

### 3. 研究の方法

研究代表者は白田由樹がつとめ、研究分担は代表者を含めた4名の研究者で国家地域ごとの課題を定めて、ベルギー関連は白田、オーストリア関係は高井絹子、ドイツ関係は長谷川健一、フランス関係は辻昌子が担当した。具体的な課題設定と方法は以下のとおりである。

(1)ベルギーを担当する白田は、「アール・ヌーヴォー」の理念を最初に打ち出したヴァン・デ・ヴェルデの思想を彼の論考記事や回想録から追い、そこに見られる「プリミティヴ」なものの志向性を、フランスのピングによるフランス的な洗練趣味の過程と対比させる中で明らかにした。また、こうした志向性と理念が実践されると見られる作品例に着目し、当時のベルギーの芸術サークルや社会主義者のコミュニティに共有された思潮との関連性を、『現代芸術』や『新社会』といった文芸誌の記事、執筆メンバーとヴァン・デ・ヴェルデの関係に着目して掘り下げた。

(2)オーストリア担当の高井は、ウィーン工房で模索された装飾デザインの変遷の背景として、芸術産業博物館や工芸学校にイギリス系「モダニスタイル」が導入された経緯や、その流れを汲んだウィーン工房でのデザイン実践、それに対する世論の反発という流れについて、工房のデザイナーであるホフマンやモーザー、資金提供者であるヴェルンドルファーや顧客・メセナとなった富裕層のユダヤ系市民と、反ユダヤ主義の高まりとの関係性と言説をもとに考察した。そして世論の圧力で保守的なバロッキの様式へと回帰する工房の経緯を跡づけるものとして、ロースの装飾批判を分析した。

(3)フランスを担当する辻は、装飾芸術中央連合や審美家たちによりアール・ヌーヴォーがフランスの様式として確立されたにもかかわらず短期間で終焉した背景として、消費者である大衆の受容の様相を考察してきた。とくに、室内装飾の蒐集が普及する際に影響したと見られる大衆向けメディアの「室内装飾」や「コレクション」に関する言説傾向に着目し、レニエの新聞小説『真夜中の結婚』およびボスクによる蒐集ガイド『美術骨董事典』を取り上げながら、その背景調査とテキストの分析を行った。

(4)ドイツ担当の長谷川は、ドイツの工業デザイン、とくに住宅建築において「即物的芸術」の理念を提唱し、実践したムテジウスの理論形成の過程と、その軸となった「土着性」の特徴に着目した。そして雑誌『装飾芸術』に掲載された記事から著書『英国の住宅』にかけての論考

を分析し、また実際に建設された住宅「ラントハウス」の作例と合わせて検討する中で、イギリスのカントリーハウスに着想を得つつ、よりドイツ的な風土や民族性に根ざしたものと発展させたムテジウスの構想を、その文化的・社会的意味や、想定されていた購買層という側面から考察した。

以上4名による研究チームで各国における芸術工芸運動とそれぞれが目指した「近代性」や「新しさ」というテーマを軸にしながら考察を進め、所属学会で研究発表や論文投稿をおこなうとともに、それぞれの調査や分析の過程・結果を報告する研究会の場を定期的に設け、論点をすりあわせながら、次の課題を明確にしていくための討議をおこなってきた。

#### 4. 研究成果

19世紀から20世紀にかけての転換期にヨーロッパ大陸で展開された応用芸術運動に関して、ベルギー、フランス、オーストリア、ドイツで提唱された理念や批評、実践の動向を相互の関係性に留意しながら、その接点や差異化の背景を掘り起こしてきた。それぞれの担当地域に関する研究成果は以下の通りである。

(1)白田はヴァン・デ・ヴェルデによる「新しき芸術」の理念と実践の原始性志向に着目し、彼が美術から応用芸術に転向する初期に協同したフランスの美術商ピングとの比較から、その特性を浮き彫りにした。また、ヴァン・デ・ヴェルデのデザインにオセアニアやアフリカの工芸が参照された可能性が見えてきたことから、彼の着想や理念に世紀末ベルギーの文芸・知識人のコミュニティである二十人会や『新社会』誌のメンバーに共有された社会思想や知識環境が影響していることを資料調査の中から論証し、その内容を研究会発表および論文で公表した。

(2)高井は、ウィーン工房の設立理念および初期デザインがイギリス工芸運動の強い影響下にあり、両者の仲介役となったのがユダヤ系メセナのヴェルンドルファーであったことを確認した。また、世紀転換期ウィーンの建築・室内装飾・工芸の分野で「モダン」を定式化したローズの理論・言説を検証し、装飾を排除してこそ「モダン」(＝現代的)とする彼が批判の矛先にしたウィーン工房が、初期にイギリスの簡素なデザインを手本にしながら、世論に押されて装飾を復活させる方針転換の背景に、保守世論の揺り返しと「イギリス嫌い」や反ユダヤ主義が関係していたことを検証し、その成果を研究会発表および論文として発表した。

(3)辻はフランスの室内装飾芸術を題材とするレニエの新聞連載小説『真夜中の結婚』を、大衆ジャーナリズムと芸術運動の関係性から分析し、個人の美学から次第に大衆化・社会化されていく1890年代の室内装飾芸術のあり方を明らかにした。また他方で、コレクションの大衆化を促進する契機の一つを担ったと考えられるボスクの『美術骨董事典』を中心に、当時出版された蒐集マニュアルの変遷を辿りながら室内装飾における「買い手」の問題を考察し、その成果を論文として公表した。加えて、コレクターの行動やその媒介メディアを切り口とする研究の可能性を「研究展望」にまとめた。

(4)長谷川はムテジウスにおける「近代性」と「装飾」の関係を考察する中で、彼が建築や工芸におけるドイツの独自性を追求する中で提唱した「即物的芸術」の理念とその実作例であるラントハウスの関係を検証してきた。またこの理念の背景に、世紀転換期の批評家・知識人の影響や、ドイツの文化・芸術感覚の衰えに対する強い危機意識があり、それはドイツ製品の「フォルム」とドイツの精神性との結びつきを強調した態度にも通底していることを指摘し、彼の芸術観・文化観の分析と考察を行った。その成果を研究会発表として公表するとともに、論文投稿を準備中である。

以上のように、工芸や建築における理論と実践、様式への反映、政治や産業界、世論との関係を絡めて考察する中で、国家や社会階層間の競合意識と独自性の模索が、各国の「新しい芸術」のスタイル創成に反映されていく経緯が確認された。

こうした3年間の研究の成果と得られた知見を外部に報告するとともに、関連する他分野の研究者の視点も入れながらより総合的に検討していく機会として、公開シンポジウムを開催した。シンポジウムには、建築学の分野でイギリスのアーツ・アンド・クラフツやモリスの研究をおこなっている杉山真魚氏(岐阜大学准教授)や、歴史学の領域でブルーノ・タウトやドイツの工業史を研究する研究者も参加・出席し、互いの知見や意見を交換する中で、今後さらに地域・国家やキーパーソンの関係性を切り口に、大陸における応用芸術の動向をよりダイナミックに捉える研究を展開させる可能性が確認できた。

このシンポジウムの内容については現在、オープンアクセスの学内紀要に投稿・掲載する準備を進めており、ヨーロッパの応用芸術・デザイン史において先行研究がおこなってきた影響源や思想的背景からの運動の理念や制作からの解明に加え、国家や地域、社会階層間の関係性と理論やメディアの言説傾向を読み直すことから各国の様式や受容の傾向を決定づけた社会的な要因を明らかにする研究の可能性を示したい。また、この期間に十分におこなえなかった研

究対象の4カ国における相互の関係性と差別化の戦略についても、今後また公開式の研究会を開催していく中でテーマ設定をおこない、掘り下げながら、総合的な視点へと発展させていく予定である。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 6件)

白田由樹「ヴァン・デ・ヴェルデの装飾デザインにおける原始性志向 世紀末ベルギーの文芸思潮と「未開民族」に関する言説から」、大阪市立大学大学院文学研究科『人文研究』、査読有、70巻、2019、43~69頁

高井絹子「ウィーン工房と「現代的」なもの アドロフ・ロースの装飾批判を手掛かりに」、大阪市立大学大学院文学研究科『都市文化研究』、査読有、Vol. 21、2019、2~12頁

辻昌子「19世紀末フランスにおけるコレクター像の多様化 エルネスト・ボスク『美術骨董事典』にみるコレクションの大衆化」、大阪市立大学フランス文学会『Lutèce』、査読有、45号、2019、27~40頁

〔学会発表〕(計 12件)

白田由樹「19世紀末のベルギーにおけるプリミティヴィズムの潮流 二十人会と『新社会』誌の周辺調査から」日本ベルギー研究会、長崎大学、2018年9月22日

長谷川健一「ヘルマン・ムテジウスの『即物的芸術』とラントハウス」大阪市立大学ドイツ文学会、大阪市立大学、2017年10月15日

辻昌子「世紀転換期におけるコレクター像の諸相 Ernest Bosc, *Dictionnaire de l'art, de la curiosité et du bibelot* にみるコレクションの大衆性」大阪市立大学フランス文学会、大阪市立大学、2017年3月26日

高井絹子「ウィーン工房の初期デザイン 異質なものの文化的摂取、混交、排除の一例として」日本独文学会、関西大学、2016年10月22日

〔その他〕

独仏語圏文化学研究会 公開シンポジウム「世紀転換期の装飾と「近代性」をめぐる問題 ヨーロッパ文化論の視座から」、於 大阪市立大学杉本キャンパス、2019年3月24日(基調講演: 杉山真魚、パネル報告・討議: 白田由樹、辻昌子、高井絹子、長谷川健一、特別講演: 中島廣子)

## 6. 研究組織

### (1)研究分担者

研究分担者氏名: 高井 絹子

ローマ字氏名: TAKAI, Kinuko

所属研究機関名: 大阪市立大学

部局名: 大学院文学研究科

職名: 教授

研究者番号(8桁): 20648224

研究分担者氏名: 辻 昌子

ローマ字氏名: TSUJI, Masako

所属研究機関名: 大阪市立大学

部局名: 大学院文学研究科

職名: 研究員

研究者番号(8桁): 20771918

研究分担者氏名: 長谷川 健一

ローマ字氏名: HASEGAWA, Kennichi

所属研究機関名：大阪市立大学  
部局名：大学院文学研究科  
職名：准教授  
研究者番号（8桁）：50597648

(2)研究協力者

研究協力者氏名：杉山 真魚  
ローマ字氏名：SUGIYAMA, Mao

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。